

# 2022年度GTセミナー 第56回保育環境セミナー 空間的環境編①

第280号 2022年7月11日発行

## ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談やご要望に応えるコンシェルジュがいるように、保育においても様々なご要望や悩みがあると思います。「見守る」+「コンシェルジュ」=ミマモルジュとして、保育に関するご要望にお応えしていくよう活動していきます。

株式会社カグヤ 奥山卓矢

## 空間的環境編①

2022年7月4日～6日に「第56回保育環境セミナー」(空間的環境編)を開催しました。

オンライン参加は約100名、オンライン参加は60施設を超えるお申し込みを頂きました。今回は、藤森代表から「空間的環境」について考え方をお示し頂きました。

本誌含め、4回に分けて空間的環境編をお送りする予定です。

### 【セミナー開催趣旨】

乳幼児教育は、その時期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることが基本です。たとえば、赤ちゃんにハイハイさせようと思ったら、その手順を教えるのではなく、自分から移動したいという動機（欲しい「もの」が前方にあるとか、抱かれたい「ひと」が少し先にいるとか）を持たせ、そこまで行くための距離「くうかん」が必要になってくるのです。そこには、もの、ひと、場（空間）が関わってくるのです。のために保育者は、乳幼児の主体的な活動を促し、乳幼児期にふさわしい生活が展開されるように、子どもが自発的、意欲的に関わるよう、物的・空間的環境を構成しなければなりません。

そこで子どもは、それまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身に付け、新たな能力を獲得し、心身を発達させていくのです。今年の環境セミナーでは、「くうかん」「もの」「ひと」という環境について具体例を通して基本から学んでいきます。

ギビングツリー代表 藤森平司（新宿せいが子ども園 園長）



---

## 第 56 回保育環境セミナー 基調講演（空間的環境編）

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

---

### —はじめに—

皆さんおはようございます。会場の横幅が広いので、前を見て、瞬間に見える視野が限られていまして、端から端まで見ることが出来ないので、皆さんがどんな顔をして聞いているか、キヨロキヨロしないとわからない。学校の教室は、前に立って話すのにいっぺんに子どもの全員が見えるよう 7m 横幅、後ろが 9m くらいです。教室や空間は、その中でやろうとするのに効果的な空間を用意することが普通です。学校の教室は、一方的に子どもに向かって話します。黒板があって、今はホワイトボードかもしれないですが、一斉に話をするのに最適な空間が教室として作られています。それを真似て、幼稚園や保育室を教室のように作っている園があるが、本当はおかしな話ですね。学校の教室みたいに部屋を作っているとしたら、一方的に保育するために効果的な教室になるんですね。しかし、色々なことが変わってきました。

### —学校の中、全ての場所を学びの場所へ—

まず、一昨日 GT 熊本に行ってきました。熊本で教育長と対談をしました。有名な方で、様々な改革をしている方で、一人一台タブレットを導入した。タブレットで授業をするとどうなるか。デジタルや、検索できるなどいろいろと言われているが、黒板で授業をしていると黒板のところで授業をする。しかしタブレットを持つと、どこの場所でも授業が出来るようになる。今、未来の学校を国が提案しているのが、学校の中のすべての場所、玄関、階段、ホール、廊下すべて子どもたちの学びの場所にしましようと提案されています。タブレットだったら教室にいる必要がない。全ての場所を学びの場所にしましようと提案されています。日本の保育室の問題に、ピアノがあります。ピアノで保育をするとなると、ピアノの場所に集まるしかなんですね。これは日本の特徴で、世界ではピアノを使って保育はしません。なぜかというと、ピアノのところに子どもが集まらないといけないからですね。ドイツではお集まりの時に歌を歌うことはするが、多くはギターかアコーディオンです。私がお集まりだけを見に行った時は、園庭で集まっていたり、ホールで丸くなって集まるとか、いろいろな場所でしていました。先生はギターかアコーディオンで歌を歌う。楽器の特徴は口を使う楽器は使わない。うちの職員が何も楽器ができないけど、どうせなら特徴のある物をしようと考えた結果、持ち運びが出来て、口を使わないものでバイオリンにしようと習いに行ってお集まりをしていました。うちの別の若い職員と話をして、何の楽器を使う？と話をしていて、手拍子にするつもりだけど、楽器が出来た方がいいと考え方結果、習おうとしているのが鼓らしいです。今漫才でやっているように、日本はピアノに縛られるのでピアノの場所に子どもを集めます。グランドピアノならまだいいが、アップライトを使うと、前が高くて子どもが見えないですね。外国では使わないです。キーボードなら持ち歩けるからいいが、空間や場所はそこで何をするかによってどんな空間を用意するかが大事です。それが新しい学校の提案の中で、そういうことが提案されています。

### —国が提案する未来の学校とは—

すべての場所を学びにしようという目的の、一つの大きな目的は、教室の中に入ることを嫌がる子どものためにということが言われています。これは学校ですので、小中高に対してでしょうけど、保育所ではないんですが、ある意味では私たちがかつて言っていた障がいの子たちを想定しています。みんなのところに来ない子をどうするか。そういう

う話の中で、その子たちの良さを生かすためには必ずしも、教室に入れる必要はないと提案されています。ドイツで小学校を見た時に、小学校の1、2年生の教室は、前の方に座る席があるが後ろにはクッションがあって寝転がりながら授業を受けることもOK。きちんと座わらなくても、ちょっと疲れたからというときはクッションに座ってもいいとなっています。3、4年生になると、こういう時は使っていいと指定されます。5、6年生になると、ソファーになってくつろぎながら友達を話すとなってきます。幼児期から通した低学年はきちんと座って聞くのは無理だという想定で学校がはじまる。日本はいきなり学校に行って、座りなさいというが、一昨日、熊本の教育長と対談をしたときは、「学校に行ったら、きちんと座らないといけないと聞くが、大丈夫か?」聞いたら、「それは、学校の問題なので幼児教育で座ってくるよう、仕込んでくる必要はありません」と言っていました。学校は工夫するべきであって、嫌がって座らせる必要はありませんと言っていた。全ての地域かわからぬが、教育に関しての考え方方がタブレットを使うことで、教室の概念が変わってくると思います。

## —どのような環境を用意するか—

仕事で変わったのがリモートです。今は家で仕事をする。以前は通勤の電車の中で仕事をしていたが、コロナが多かった頃は、新幹線の中にリモートワーク出来る車両が用意されていました。何をするかによって、どのような環境を用意するかが変わってくる。幼児教育は学校ではありませんので、学校をモデルにしたような空間づくりは本来おかしいですね。幼稚園を作ったフレーベルでさえ、学校のイメージを持っていません。日本だけですね、幼児教育を学校をモデルにしたような園舎づくりと教え方、発達が全く違うわけですからね。もう一つ、対談の中で小学校の1、2年生が生活課になった時の私が書いたブログを司会者が印刷をしていました、どうして生活課になったか再度話をしました。私たちの頃は理科と社会でした。子どもたちは、脳の臨界期といわれる3、4年生までは基本的には目で見て、触って、体験したことから学びます。バーチャルの世界で学べない。学習指導要領の算数には、すべての項目に具体的物を通して書いてあります。昔は算数セットを使うなどあるが、具体物を通して学びます。社会や理科も直接に感じられるいわゆる社会の最初は学校で働く人たち、町で働く人たちを学びます、理科は朝顔を育てる、生き物を買うとかを通して子どもたちが実際に見て、体験することを学びます。それを3、4年生くらいになると、バーチャルの世界が出来るので、行ったこともない地理を学んだり、生きたことのない歴史を学んだり、小さい頃は自分の育ってきた町を学び、次第に歴史になる。子どもたちの生活の中から学ぶということで生活課になった。私たちはその一個前なので、経験カリキュラムといって実際に経験することから学ぶことがカリキュラムの特徴です。理屈で頭で学ぶのではなく、実際に体験をしていく。当然体験ができるようなことが環境です。知識を言葉で、写真だけで伝えていく学校の授業を想定するような保育室であってはならない。実際に自分たちが触ったり、見たり、聞いたり、関わったりして学んでいく場ということですね。それらの大きく影響するのが人という環境ですね。

## —これからの役割—

教育長がこれからの学校は授業を教えるだけではなく、地域の子育てセンターになったり、障がいの子を見たり、子どもたちが駆け込める場所になる必要があると言っていました。その時に教員は教える資格はあるけど、それ以外の資格は持っていない。部活の顧問をするけど、顧問をする資格はない。今、外部委託をしようと検討されているが、働き方改革だけではなく、その専門性を持っていない、子どもの心のケアや、地域にやるとか教育長は特化していくのではなく、子どもたちを支える場所として機能するべきと考えているらしいですね。教育長は東大を出て、ハーバードの大学院を出ている。そうすると外国には、学校スタッフの半分は教員で、残りは違うキャリアを持った人がいる。日本は学校の中にそういう人がいない、教員しかいない。これは世界では珍しいと言っていた。新しい学

校の提案の中に、教職課程を出て指導する以外の方に、いろいろなキャリアを持った人たちで学校は構成すべきといっています。保育所も保育士の資格しかダメと言われています。そうじゃない人を入れようとする反対にあります。保育士さんはその他のケアが出来るかですね。いろいろなキャリアを持った人で構成すべきという提案はありだと思います。それは空間にも反映されます。私の園で職員がこんなエピソードを話してくれました。卒園児の4年生の子が園にきました。その友達がけがをして園に来た。けがをしたときにとっさに、学校に行こうか、家に行こうか考えた結果、保育園だった。本来、それらを学校がその機能を持つべきだという提案を教育長がしていた。逆に私は、こども園や保育園がそういう場所になるべきだと思います。

### —真心をもって接する—

機能を持つためにいろいろなことがあるが、見守る保育の3省を作った中の2つ目が「真心をもって接しますよ」。人格が伝わる仕事だと言っているが、空間に結果的に繋がるが、私は最近食について危惧している。高田馬場に自然栽培で無農薬を使ったレストランがある。そのシェフと言っているが、日本は遺伝子組み換えは危険なことだが、世界一使っている国です。除草剤も世界で禁止されているものを、日本だけ使っていて危ない。そのシェフに講演してもらうが、こんなエピソードを話します。20代の時にイタリアに修行に行っていました。そのレストランのシェフは有名で、ミシュランの星付きの元で4年間修業し、食も安全、きれいな盛り付け、野菜中心の店だったそうです。ある時、市場にシェフに仕入れに行こうと誘われ、一緒に歩いていたら、急にシェフが突然走り出したらトイレに駆け込んだ。トイレに行きたかったのだと思ったら、糞尿まみれで、あるお年寄りが倒れていて助けて、救急車を呼んで送り出したと。助けるために猛ダッシュをした。良かったと思って帰ろうとしたら、そのシェフは外に立っている人にモップを借りて、掃除をし始めたと言っていた。自分では臭くていられない中、掃除をしていった。それを聞いた時、美味しい食事を提供するには相手に思いやりがないといけない。そのためには、人に対する思いやりを持っていないと美味しい料理は出来ないと聞いた時に、保育もそうだと思っています。技術が高くても、その子に対しての思いやりの心がなければいい保育にならないと思います。私たちは、ドイツに行ったときにツアーを組んで行ったが、最初感心したのは園ごとにおもてなしをしてくれました。それを見てもらおうと思います。見学をした後にホールへ行くと、花やナプキンが上手に飾られ、園のしおりなどもしゃれた飾りがされていました。バターやミルク、炭酸水、紅茶やコーヒーあり、好きな物を注ぐ。園のしおりを飾るのに、赤い布を並べて紙で作った花を置くなどしゃれている。草原に花が咲いているかのような飾りつけがされている。見学先のおもてなしでレストランではない。さりげなく飾ってある。このセンスが保育室に現れている。日本に来て、うさぎさんくまさん、向こうはこういう飾り付けがされている。センスがいいというか、しゃれていると思う。ナプキンが飛ばないように石を置き、電気の当たる方もしゃれている。ドイツでは朝飯を食べて1園見学へ行き、お昼を食べてもう1園見学に行くが、お腹がいっぱいだが、おもてなしでケーキが出されたりする。有り難いがお腹いっぱいで食べれない。ある園では保護者がケーキを焼いてくれた園もあった。これを調理が作っているのかと思う。調理員は100人定員のところに1,2人しかいない。お客にも出すので、バイキングのように出すのは自然なのだと思う。ある時、ミュンヘン州の教育庁さんの自宅に招待され行きました。自宅の写真も数枚あります。棚の上にずらっと調味料が並んでいます。

### —壁面装飾のセンス—

保育室に影響しているのが壁面の飾りで、乾燥した植物がぶら下がっている。壁にツタが伝っている。保育室が全く同じような装飾がされている。家でもそういう感じ。玄関の脇にも麦か何かが掛かっている。保育室でもそう。外で食事をしたがピザ窯。外で食べるときは旦那さんがすると言っていました。庭のあちこちにローソクを立てる。こん

な風がいいかどうかわからないが、日本の文化的な飾り方もあると思う。それが私からすると、保育雑誌の壁面装飾から来て、昔からしているからのように思うかもしれないが歴史としては浅い。私が保育業者と関わっていたころだが、壁面装飾のページが出来てから各園で壁面装飾をするようになり、毎月誕生表が作られ、時間をかけて作って飾っていたが、私が保育を始めた頃は月末忙しくなり、4月当初に誕生表を作るのが大変で、ある時止めました。

## —自分の自宅にどういった装飾を行いますか?—

私が、せいがの森を作った時に園内研修で職員に言ったのが、皆さんのがけなしをお金で貯めて家を買った。閑静な住宅街に家を買って、その絵を装飾をするときに玄関入って何を飾りますか?しゃれたものにしませんか?若い人は、そういうセンスを持っているのに、保育室になると、保育室のイメージを持ってしまっている。職員には、保育室のイメージを捨てて、自分の家だったらどう飾るのか考えて欲しいと言いました。もう一つは世界のカレンダーを見て、自然の絵が書かれています。昔イタリアに行ったときに、町がレンガ造りで、ベネトンカラーが流行った。向こうの人にくすんだ街の中でベネトンカラーのような派手なもの生れたのか聞いたら、それは自然の色だからといっていた。自然にないのはパステルカラー。真緑の草原で、真っ青な空、真っ白な雲を見ると落ち着くが、人間は原色ほど落ち着くのに日本は原色を嫌がる。必ずくすませる。その方が落ち着くようなイメージがある。ギラギラしすぎるのは強すぎるが、そういう刷り込みを止めようと話しました。自然のものは原色でできている話をしたことを思って、保育園の環境づくりに派手だけではなく、どう飾るかの刷り込みを止める。子どもっぽいというのを、子どもを馬鹿にしている。子どもでもいいセンスを持つ。その中で極端なことを言って壁面装飾をなくしている園長先生がいます。壁面があると集中できないので、すべきではないという人もいます。それをあまり賛成していないのは、保育雑誌の編集に関わっていたが、我が家に毎月持つて帰り、自宅を壁面装飾をしていました。カレンダーを誕生カードではないが、自分で凝ったものを娘が作っていた。息子は全く絵に興味がなく、字ばかりに興味があった。幼稚園の頃、字ばかり書いていたので絵でも書けと言った覚えがある。息子が自由画帳をもって来て、「今日はチューリップを書く」と言ったので見たら、カタカナでチューリップと書いていた。二人の兄弟を見ていたら、どっちが勉強かどうかではない。絵に興味のある娘もいれば、カレンダーの下の字を息子が担当していた。家の中が壁面装飾だらけでした。娘はその結果、美大に行った。学校でも娘は5、6年の時、体育館の装飾担当になりました。まったく壁面がないのもその園の趣味で、どっちであってもいいだろうと思います。うちの園ではしていないかもしれないが、保育雑誌の装飾を切り取って、製作ゾーンに置いておいたら子どもが真似して、作ることもあるので良いだろうと思います。私たちは大人の判断で決めてしまうが、その子によって違います。もう一つ思い出されるエピソードが、筑波でつくば博に行きましたことがあります。そのイベントに20年後の子どもに手紙を書きましょうというイベントがあった。息子が何となくうさぎを書いて、息子が絵を描いた写しを取って置いておきました。つくば博に行って20年後に文章で、お父さんは絵を描いてくれて嬉しかったと書きました。それが20年後に届いて妻がそれを見て、「あんたも若かったね」とごみ箱に捨てられました。いいことに書いたのにと思ったら、妻が「今あなただったら、字を書く息子に対して、字を書きたかったら書いてもいいよ」「字を書くのがよくなくて、絵を描くのがいいと思っていたのでしょうか?」といわれ、確かにそうで、人がどれがいいかを当てはめてもダメですよね。一つにはチーム保育をする理由の一つです。お集まりを週ごとにリーダーで交代をしてやる。楽器もやり方も違うのは、子どもによって多様性がある。それぞれのいいところを伸ばすためには、いろいろな体験が必要だろうと色々なタイプにお集まりをしてもらっています。装飾も色々な人がアイデアを出すと。そこになるべくしないで欲しいのは、子どもだまし用ではなく、大人でも耐えられるものであってほしい。そういう空間づくりをしてほしいと思います。

## —保育環境づくりのヒント—

それには自分たちがいろいろ体験をして、知っていかないといけない。環境を通してというのは、保育の中心ですけど、先生たち保育者的人格や経験、考え方が伝わる保育ですね。知識を伝達するなら、あまり伝わりません。しかし幼児教育はそうではないですね。その辺りは気を付けていかないといけないと思います。国が保育者の仕事を重んじてもらわないと、ただおむつを替えるとかの仕事ではないということです。装飾一つにしても思い込みではなく、子どもたちの将来に対してのセンスや、生きるときの環境から影響させていく用意をするということです。私は、テレビのブラタモリに真似て、ブラ平司といって、職員と休みの日町を歩いて、町のセンスを取り入れようとしています。装飾の仕方いいね、この出し方いいねと、見つけて歩くことをしています。環境のヒントは至る所にありますし、企業はそういうことに敏感ですので、そういう体験をしていくといいと思います。こういうのもいいねというものがあると思います。環境を学ぶのに机で学ぶよりも、いろいろなところでヒントを得る。もう一つ環境の持つ教育力、教育的意味もあります。私が建築を出たこともあるが、割と今は講演が多いが、初めて講演をしたのは、小学校の事務職の講演でした。テーマが「事務職から教育をすることが出来る」だったが、廊下に何かをしまう棚を買おうと、その棚が引き戸なのか開き戸なのか、右開き、左開きなのかで子どもの行動を変えることが出来るという想定だった。平らなのところに突起物を置いただけで遠回りをしたり、ジャンプするかもしれないと環境によって子どもの行動を変えられるという講演でした。(次号に続く)

本稿は、2022年7月5日に開催した「第56回保育環境セミナー」の基調講演の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)